

内向き思考とグローバル化

情報・システムソサイエティ会長 横矢直和



内向き思考とグローバル化という、相反する言葉を見聞きすることが多い昨今です。電子情報通信学会が関係する分野で内向き思考を象徴しているのは「ガラパゴス現象」でしょうか。身近なところでは、進んで国際会議で発表しようとしないう、英文ジャーナル論文を書こうとしないう（情報分野の一部で顕著）、海外留学や長期在外研究に出かけようとしないう、といった話をよく聞きます。これらの原因として挙げられるのが、日本にある程度の規模の市場がある、日本にいても何とかなる、日本語でも論文に変わりはない、就職活動が厳しく留学どころではない、任期付きポストなので在外研究のための長期出張はできない、といった「何とかなる」と「やむを得ず」です。一方、グローバル化に関しては、産業界における国際競争に勝ち抜くための開発・製造拠点の海外移転、大学における留学生の獲得を目指した英語による授業のみで修了できる国際コースの設置などが典型的な取組みです。このように個人レベルの内向き思考と組織レベルのグローバル化のギャップが最近が目立ちます。世界経済のグローバル化という外的要因から、企業も大学も組織レベルのグローバル化は避けては通れず、後戻りはできない状況にあります。このギャップを埋めるためには、個人が内向き思考から国際的に勝負しようという外向き思考に変わるしかありません。海外に出て、異文化の社会でカルチャーショックを受けながら、言語の壁に苦しみながら、競争的な環境の中で切磋琢磨することによって個人レベルの国際競争力を身に付ける。それが日本の学界ひいては産業界の活力アップにフィードバックされるという好循環が必要でしょう。これからの社会を支える若い人たちの挑戦心に期待するところ大です。

ただ、内向き思考の打開というスローガンや頑張り頑張りという叱咤激励だけでは無理があり、外向き思考になる環境作りが重要です。「何とかなる」は通用しなくなってきたことに多くの人が気付いています。が、「やむを得ず」の解消はまだまだです。海外に出やすい環境作りはシニア世代の責任です。最近、大学によっては、助教などの若手研究者を対象に長期海外派遣による国際競争力向上を目指したプログラムを独自に作る試みが始まっていますが、文部科学省でも今年度、日本の長期海外派遣者数がこの10年間で半減している現状への危機感から、従来からの日本学術振興会の海外特別研究員制度とは別に、内向き思考打開のために国際共同研究と連動した若手研究者海外派遣プログラムを開始しました。来年度は更に、若手研究人材に挑戦の原資と環境をサポートするための施策が計画されているのは喜ばしい限りで、拡充と継続的な施策として根付くことを期待したいものです。

本会でもグローバル化には喫緊の課題として取り組んでおり、行政機関や研究者の所属機関とは違った形で、内向き思考の打開に向けた環境作りに貢献できるはず。例えば、近隣の海外の大学や学協会と連携した研究会の海外開催、国際会議の招致・共同開催、英文論文誌の充実・専門分野での英文オンラインジャーナルの発刊などが、若手研究者が海外に目を向け、自分の研究成果を世界に発信し、気楽に海外に出かける環境作りに寄与することは明らかです。個人的な経験でも、長期の海外滞在は様々な面で以後の研究生活に大きな影響があったと思っています。若い人たちは、環境を有効に活用して、まずは一歩外に踏み出してみましよう。出たら大変？ 帰ってきたらまた大変？ いや、それこそ「何とかなる」のです。